ベジタブルウエポン

無花果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ベジタブルウエポン

【Ｎコード】
Ｎ３４７５Ｕ

【作者名】
無花果

【あらすじ】
この物語は、バカバカです

モノローグ（前書き）

起こってしまう

モノローグ

非日常を望んでいた。
いつも通りの日常がとてもつまらなく感じてしまうお年頃。
朝起きて学校へ行き、勉強。家に帰るとゲーム、マンガ、アニメ、小説。そして明日を迎える。
二次元のような出来事に憧れていた。
非日常
物理的不可能な出来事が起こってしまう日常
1歩踏み込めば一般的日常に戻ることができなくなる。
踏み込むのは一瞬。
一瞬で持って行かれる。
そして俺は、持って行かれてしまった。
今までの生活には…
戻ることなどできないことが待っていた。

モノローグ（後書き）

ふ？

非日常

俺、九式無花果（くしきいちじく）は一週間前に車封（しゃふう）高校に入学した。

車封高校はクラスが１０クラスある。成績は全国最低の学力。

いわばおちこぼれの集まる学校なのだ。

俺の成績は悪くない。

むしろ高校をすっ飛ばして東大も狙えるぐらい頭がいい。

自信がある。

そんな俺が何故こんな低い高校を選んだのかと言うと…

近いから。

……

まぁね。

そんな理由なら高校すっ飛ばして東大に行けるぐらいだから、例え遠くても東大に行くよ。

将来の事を考えて。

勉強面が理由でもある。

頭いいのにとか思ってる？

でもね…

頭がいい＝勉強好き

知識がある＝勉強好き

そうとは限らないんだ。

俺は勉強が大っ嫌い。

それと、もう1つ。

車封高校を選んだ理由がある。

違う景色が見たいからだ。

最低ランクを見てみたいからだ。

親は『自分の人生は自分で決めろ』と言った後、進路への口出しはなくなった。

推薦合格。

当たり前だ。

先生方は「何故ここなんだ?」と言うが、「近いから」で全て通している。

「最低ランクを見てみたいからだ」

なんて言えるわけがない。

そして入学して一週間を体験して思った。

周りがウザくなっただけだった！

それはまだいい。許そう。

想定の範囲内だからな。

だが……

久遠寺延（くおんじすすむ）

最前列の右端の男子生徒…

サングラスと帽子

サングラスと帽子

そう…

あいつ、毎日サングラスと帽子つけてやがる。

おかしいだろ！

別に日光が当たる訳でもないのに。

誰かつっこめよ！

あれじゃただの不審人物だよ！

この一週間ずっとだ。

入学式の時にサングラスの事を言う奴がいた。

そいつもさすがに気になるようだった。

思いっきり言ってやれと思った。

「サングラス、格好いいね！」

……

そこーーーーー！？

違うだろ！

確かにサングラスは格好いいと思うよ。

でも違うだろ！

つっこめよ！

感想じゃなくつっこめよ！

「あっ、それと…言いづらいんだけど…」

そうだ、それだ！

言いづらくなんかない。堂々とつっこんでやれ！

「その帽子はないでしょ」

……

てめぇはスタイリストか！

ファッションの事しか言ってねぇよ！

それから誰1人としてサングラスと帽子を話題にする奴はいなかった。

もう1つある。

机の上に猫がいるのだ。

黒猫

鋭い赤い目をしている。

いつもは寝ているが、起きると教室を出てどこかに行ってしまう。

延はたとえ授業中でも猫を追いかけて出て行く。

……お前帰れ

帰ってサングラスと帽子つけながら猫の世話でもしてろ。

ってゆうか…

先生！

大丈夫ですか先生！

３０代に見えて、もう老眼ですか！

それなら歯も全部入れ歯ですね！

最低ランクどころじゃない。

意味わかんねぇよ！

非日常2

車封高校には東屋上と西屋上がある。

いつも賑わっている西屋上に対して東屋上はまったく人がいない。

『東屋上には七不思議の全てが集まっている』

そんな噂があるのだ。

「いけね、忘れ物だ」

今日の昼休み。

東屋上に行った。

俺はいつも西屋上で本を読んでいる。

多少うるさいが。

でも今日は太陽サンサン。風も東から西向きだった。

日陰も出来ないし、東西を分けている大きなコンクリートのせいで風が当たらない。

仕方ないので東屋上に行くことにしたのだった。

さすがの俺も怖さはあったが、行ってみると、とてもいい場所だった。

誰も使っていないからか、ゴミ1つなかった。

さらに少し登って、そこで本を読んだ。

ちょうど日陰も出来ていて風も心地よい。

見下ろす景色も申し分なかった。

気分はさながら大統領だった。

気持ちいいので少し寝た。

最高の昼休みだった。

噂も、何も無いようだし。

これからはここに来よう。

本を忘れた。

時刻は深夜2時。

好きな本だし、汚したくないので（まあ、あそこに置いていても汚れるとは思えないが）取りに向かっている。

噂に、『忘れ物をしてしまう』なんてあるのだろうか。

……あり得る。

何て言ったって最低ランクだ。

学校は真っ暗だった。（当たり前だが）

…怖い。

けど、ここまで来たら引き返すわけにはいかない。

すんなりと中に入ることが出来た。

まあ戸締まりにしてもこんなもんだろ。

心臓が早鐘のようになるなか、忍び足で（忍ぶ必要はないが）なんとか東屋上に着いた。

本は傷一つなかった。

よし、後は帰るだけ…

「何してる？」

扉をくぐろうとした時、後ろから声がした。

背筋が凍った。

けど恐怖はなかった。

幼いような声だからだろうか？

振り返ってみると、そこには…

延がいた。
サングラスと帽子をつけて。
「……」
「何してるって聞いたんだけど。」
……うわぁ。
延の声初めて聞いたが…
こんな幼い声してんのか。
クール口調が台無しだ…
「あ、あぁ！本を忘れたから取りに来たんだ。」
俺ははにかみながら言った。
「……」
「そっちは何してるの？……猫と」
よく見てみたら隣に猫がいた。いつも延と一緒の黒猫だ。
「……帰れ」
「……」

ヤバい！

面白すぎる！

わざわざ振り返って首を少しこちらに捻って

「……帰れ」

幼い声してるくせにクールに喋る口調と見事なミスマッチ！

笑ってはダメだ。

失礼だ。

ただでさえサングラスと帽子なんだ。

「なぁ、教えてくれよ。」

気になる。

「……」

「教えて…くれないか…な？」

「……ジョギング」

「……」

ジョギング！？

深夜2時に学校の屋上にジョギング！？

「ごまかしかたが下手ね」

……

猫が喋った！？

普通の女の子みたいなセリフを！！

っていうか、やっぱごまかしかよ！！

「…まあいい。本当は何してるの？」

「……バンジージャンプ」

「命綱が見当たりませんが！？」

天体観測とかあるだろ！

素か！？

ボケているのか！？

「はぁ…。私から説明するわ。」

おぉ！教えてくれるのか！？

……猫が

「平和を守っているの」

「……は？」

「本当よ」

「いや…」

「…来た！」

延がそう言って屋上の端に視線を移した。

俺もそこを見てみると、１人の男の子が立っていた。

「へぇ、今日は１人多いんだ」

とても静かな声をしている。延と違ってクール口調が似合いそうだ。

けど、口調は普通よりは子供っぽい。

男が近づくにつれ、体が月の光に映し出される。

「……」

見てみると、身長は１５０？、童顔だった。

「……ふっ」

「どうした無花果？…いちじくだっけ？」
延が俺の顔を覗きこみながら言った。
「いまは俺の名前よりお前ら2人に聞きたいことができた。」
「なんだ？」
「へぇ、最初に僕を見て驚かないなんて。いいよ」
2人は快く（？）返事をしてくれた。
「お前ら…声帯交代しただろ」
「してないが」
「へぇ、してないよ」
「じゃあなんだそのスタイルや性格と反比例した声と口調は！？遺伝か！？遺伝なのか！？…そうか、ギャップだな！？ギャップなんだな！？スプレーでも使ってんのか！？えぇ！？おい！！」
「…お前そんな奴だっけ」
「へぇ、よく喋るね。うざいうざい」
「俺をそんな奴にしたのはお前だ！あと、うざいのはお前の『へぇ、』って言う語頭だ！」
いやぁ…

人生、視点を変えるだけでこんなに多くのツッコミ所があるのか…

俺も限界がきそうだ。

「そんなに喋って喉渇いただろ。これでも飲め」

「あぁ、その気遣いに面じてどこから飲み物入りのコップを出したのかはスルーしよう。……って熱っ！熱すぎるよこれ！しかも中身はただの水じゃないか！何でわざわざあったかい水なんだよ！？喉の心配のついでに寒さも気遣ってくれるなら、コーンスープやクラムチャウダーにしとくぐらい気遣えよ！」

「…久しぶりだな…刃（やいば）」

「へぇ、こちらこそと言っておくよ、延。」

「スルーかよ！」

うざくなったんでシカトすることにしたのか？

「お前と決着をつけないとな」

「へぇ、そうだね。」

「……あの…やいば…だったっけ？」

「へぇ、そうだよ、何？」

「お前俺がさっきうざいって言ったのにまだ『へぇ、』って語頭に

言うのかよ?あと、『へぇ、』って、後の言葉と全く繋がってねえよ。違和感ありまくりだよ。」

「うるさいなぁ。これでも読者に気を使ってるんだよ。キャラの区別がつくようにね……あっ……へぇ」

「何言ってんだお前!?しかも『へぇ、』って言うの忘れたからって語尾にするな!ますますわけわからんわ!」

「へぇ、我慢してよ。読者のためなんだから。」

「お前の脳内が我慢ならんわ!」

さっきからわけのわからないことを言いやがって。

電波男か?

最近電波は女しかいないから自分から電波男を流行らすつもりか?

「へぇ、これだから地球人は…。冥王星人は読者を大切にするんだ。」

「やっぱ電波だった!」

っていうか、随分遠いところをチョイスしたな!

「へぇ、さて延。」

「あぁ、てめえに勝つ!」

ビリビリッ

「……っ」

さっきと空気が変わった…

「あんたは下がっててて。全く、おとなしく帰ればよかったのに」

黒猫が言った。

…本当に平和の為に…

バトルが始まろうとしていた。

初バトル

「なぁ、黒猫」

「何？」

「本当に平和を守っているのか？」

「そう言ったじゃない」

今目の前の現実を受け入れるのには、俺にとって時間が必要だった。

まさか本を取りに来たらこんなファンタジーに遭遇するとは。

「なぁ、黒猫」

「何？…あと、黒猫って言わないで。私にだって、ちゃんと名前があるんだから。」

「そうだったのか？…ごめん」

「ま、わかればいいんだけど」

……

なんか……

とってもまともそうだ。

ここに来てからもうツッコミばかりで、明日と言わずに今日中に声が枯れるかと思ってたが…

あぁ……なんだろう。

普通って、いいな。

普通最高！

……猫だけど。

……猫で喋ってるけど。

もうそんなことはどうでもよくなる。

「それじゃ、名前教えてくれないかな。」

「最終銀河系の端の端から来た、マーシャル大家（おおけ）の1人娘。リースよ！」

「普通どころか電波＋厨二（ちゅうに）だった！」

いやいや……

電波＋厨二って…

単品でさえも会話内容を作るのが難しいのに、ミックスしちゃったらとてつもない事になるよ。

（やっぱ木星にいるアーシュ家が最強だね）

とか…

（最近火星に新たな敵対生物が現れたようなんだ！許せねえ…今すぐ火星に行ってやっつけよう！）

とか…

毎日どうでもいいことに脳内フル活用するようになるのか。

……

……フッ

フフフッ…

フフフフフ

やっぱ外見が猫。そしてこの2人と一緒にいる時点でまともではないよな。

小さい頃、『外見で人を判断してはいけません！』って先生が言ってたけど、考えを改めないといけないようだ。

「ねえ、何をそんな『とてもここにいては今までの人生の教えが全く役に立たないなぁ』という目をしてるの？」

「実際これまでのやりとりは1つも脳内フォルダには存在しないやりとりだったよ。そしてこれからも理解できそうにないよ。」

向こうの2人とも。
そして君とも。
「私はまともよ」
「君がまともなら、世界中の人間は酸素ボンベも持たないままで色々な星に、いもしない生命体を倒すために旅立ってるよ」
そして多分みんな窒息死だな。
いや、絶対か。
「さっきのは嘘よ。リースって名前は本当だけど」
「そうか、それは助かるよ」
まじで。
最高に。
喉が助かる。
「あなたは…無花果?だったっけ?さっき延が言ってたけど」
「あぁ。そうだよ」
「格好いいわね」
「ありがとう」

「自己紹介も済んだ所でいよいよ始まるわよ」

延と刃は戦闘体勢になっていた。真剣そのものだ。

「俺の『ライ剣』で速攻終わらせてやる」

「へぇ、こっちこそ。『バーニングソード』の餌食となってもらうよ」

よくわからない会話が始まった……が

これから凄まじいバトルが始まろうとしている事はわかった。

延は持っていた袋から『ライ剣』を取り出した。

それを見た瞬間、俺は言葉が出なかった。

白と緑の色をした剣だった。

いや、あれは剣とは呼べないな。

う～ん。

何と呼べばいいのか困る。

シンプルには言えるんだが…

シンプルに言って大丈夫なのかどうか…

……まあ

本当にシンプルに

本当にシンプルに言えば…

大根だった

大根

だいこん

野菜

野菜類

食物

食物は文字通り食べる物である。

「おい延」

「なんだ？今からバトルが始まるのがわからないのか？」

「いや、そんなのわかってる。わかりきっている。今までの雰囲気でバトル以外は想像できなかった。……けど、今お前が取り出し

た物を見て変わった。」

「『ライ剣』がどうかしたのか？」

「てめぇが持っているのは直視しても逆立ちで見ても建物の陰から見ても１８０度どの角度からどんな風に見ても大根じゃねーか！！！」

「なっ！？」

「『なっ！？』じゃねえよ！なにが『ライ剣』だよ！？」

「大根の『だい』と剣をかけてみました」

「なんもかかっちゃいねぇ！かすりすらしてねぇよ！」

さっきまで、ライ剣だって？超かっけー！雷属性で、大剣だからライ剣なのかな？やっべー！どんだけ神々しいんだろう！？早く見てみたいよ延様！って気分だった自分がバカみたいだ！

「あんたもしかしてライ剣の事、雷属性で…」

「黒猫！もとい、リース！それ以上は言うな！」

「とにかく、刃との勝負に口出すなよ」

「待て！俺がお前に口出ししたのはそれだけじゃない。」

「……何？」

「お前、勝つ気あるのか？」

「当たり前だ。負ける気なんてさらさらねぇよ」

「負ける気しかしない！」

大根で人間に対してなんの殺生力もねぇよ！

精々、打撲ぐらいだ。

「そんな大根でバーニングソードに勝てるわけねぇだろ！」

「へぇ、そこのお兄さん。わかってるじゃない」

刃が言った。

「へぇ、そんなのでバーニングソードに勝とうなんて笑ってしまうよ」

そう言って刃はマントの内から取り出した。

「へぇ、どうだい？僕のバーニングソードは？」

……

ま、まじか…

なんと言えばいいのか。

これもシンプルに言えばいいのか？

シンプルに

シンプルに言えば…

にんじん

にんじん

野菜

野菜類

食物

食物は文字通り食べる物である

「バーニングなのは色だけだー！！！」

もうどうでもよかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3475u/

ベジタブルウエポン

2011年10月9日10時53分発行